

## エッセイ

## 豊饒の海と

## 輪廻転生思想雑感

長谷川憲司

この哲学的な観念について大いに興味を持ったのは、おそらく自分の生涯が最終章に近づきつつあるということに大きな関心を抱いているからであろう。巨視的に眺めると人類の歴史という大きな潮流の中で、1人の命は時空の中に消えてゆく、はかなくちっぽけなものである。また、生物学的に生命の誕生を考えると、古くはロシアのオパーリン博士による「生命は宇宙の塵の中から生まれた」とする説が今は有力である。それでは、誕生した生命の最期はどのようなものであろうか？生物を構成する細胞の大部分は一定回数分裂を繰り返し増殖し、更に細胞は集団を作り組織を構成し、その場所に適した指令により分化する。つまり、我々の体の中の器官・臓器をうまく配分する。組織培養を行っていると、1つ1つの細胞にはそれぞれ表情・顔があり、

顕微鏡を覗く者に対して最終的な個体の性質を想像させてくれる場面もある。そして、細胞は一定回数分裂を繰り返した後に、アポトーシス（プログラム死）によって死ぬ運命にある。つまり、役目を終えたものは去っていく運命にあるということである。更に微視的に見てみると、細胞の分裂回数を決めているものは何かというと、染色体末端のDNA（遺伝子）にあるテロメアという繰り返し配列である。このテロメアは細胞が分裂することに短くなっていき、最終的に細胞は死に至ることが知られている。このような観点から生命の誕生やその死を科学的に見つめていくと、科学、特に最新の分子生物学から命をみることをむなししいと感じる方も多いかと思われる。

大学1年生の秋も深まった昭和45年11月25日に、授業の合間に教室がざわついていた。聞こえてきたのは「三島が自衛隊で自刃した」という話題であった。私自身はその当時既に三島由紀夫の小説を何冊か読んでいたので、あの意味では衝撃ではあったが、そのころの書物から読み取って三島

この行動は当然の帰結として密かに予測していたように思う。その後、遺作となる4部作「豊饒の海」が刊行されたので、その時一気に読んだ思いがある。あれから約半世紀のち、最近再び読んでみたのである。4部作は、『春の海』、『奔馬』、『暁の寺』、『天人五衰』の構成からなる。主人公は各巻別に入れ替わり輪廻転生を繰り返す人物である。また、全巻を通して同じ副主人公が、観察者・記録者の役目を持ち、話が進んでいくのである。時代設定は日露戦争後の明治末期から描き始められ、大東亜戦争にかけてである。こういった流れを見ると、輪廻転生を題材とした大河歴史小説と言える。

第1巻『春の雪』は、侯爵家の跡取りとして生を受けた若干18歳の青年が松枝清頭が主人公として、更に学習院高等科の同級生の『本多繁邦』が副主人公として登場する。本多は第1巻では18歳であるが、最終巻では80歳の老翁として最後まで現れる。松枝侯爵の令息・清頭は幼なじみで没落伯爵綾倉家の娘「聡子」と恋仲になるのだが、聡子との恋愛物語はみやびな香りがまだ残る明治宮廷の情

念に満ちた優雅でロマンチックな風景を写しだしている。小説は全巻を通じて、死を常に焦点に据え、この世に残す魂(たましい)の思いをインド仏教の聖典にある輪廻転生を繰り返すことで、はかない命の滅びに光を当てているようである。第1巻の清頭は聡子との恋に破れ20才の若さで夭折し、魂は次巻『奔馬』の主人公「飯沼勲」に引き継がれる。清頭の強烈な聡子への思いが現世では果たされないうちに、純粋な死を夢見る「飯沼勲」に引き継がれるのである。清頭は亡くなる直前に本多に向かつて、「・・・又、会うぜ。きつと会う。滝の下で」と言い残して、転生しての再会を約束する。

第2巻『奔馬』の主人公勲は、松枝家の書生であった飯沼茂之の父に持つことから、本多(当時38歳)と出会い、親交が始まる。まさに、本多は滝の前で清頭と同じ場所に3つの黒子がある勲を目にして、死に際の清頭の言葉を思い出して慄然とする。勲は剣道に優れ、神風連の乱(近代兵器を嫌い、刀と槍だけで明治政府に対して起こす反乱)にあこがれ、同士を集め腐敗にまみれた政財界人の

暗殺を計画しその決起寸前、志半ばで計画が発覚し牢獄に捕らわれる。しかし、最後には1人で蔵原という財界人を暗殺し逃げる途中、潮騒の海辺を前にした崖で壮絶な割腹自刃するという小説である。その時、勲には「正に刀を腹に突き立てた瞬間、日輪が臉の裏に赫奕(かくやく)と昇った」と文章が締めくくられる。この中で勲は清頭の生まれ変わりであった。仏書の中の四有輪転によって、20歳を前にした勲は清頭の死から数えて転生年齢にびつたりあうことを本多は確信している。第2巻は三島由紀夫の最後とイメージが重なるストーリーである。清頭と勲は現世に残した思いは異なるが、まさに夭折を繰り返し、次の第3巻『暁の寺』に引き継がれる。

第3巻『暁の寺』では本多は既に58歳になっている。輪廻転生先はタイ王室の姫「ジン・ジャン(月光姫)」である。ジン・ジャンが幼い7歳の時、タイで初めて本多と出会い「清頭や勲のことを言い当てるのである。その後、大人になったジン・ジャンは来日するが、そのころのジン・ジャンは既に「前世の記憶」は覚えていな

い。本多は何とかジン・ジャンの中に輪廻転生の証を見つけようとするが失敗、ジン・ジャンはタイへ帰国し、最終的に姿を消すというくだりである。後に本多はジン・ジャンが20才の時に蛇に噛まれて死んだことを知る。やはりこの巻でも魂の存在がテーマとなっている。

最後の第4巻『天人五衰』では輪廻転生先ではない偽物「安永透」が主人公になっている。既に76歳になった本多の大きな勘違いによって、透の人生は狂わされ、透は最後に廃人同様な生活を送ることになる。これで本多が描いてきた転生の夢は破局に導かれることになる。本多は自分の死期を悟り、60年ぶりに昔の清頭の恋人でその時既に出家して、奈良「月修寺」の門跡となった聡子に会いに行く。そこで、本多が清頭のことと触れると、聡子は言う。「・・・松枝さんという方は、存じませんな。・・・」そして、これまで本多が追い求めてきた輪廻転生について、聡子は「それも心々(こころこころ)ですさかい」と言い、本多を強く見据えたのである。寺の縁先で、夏の日盛りのしんとした庭を

前に本多は何もないところへ来てしまったと感じる。

さて、折しも2018年11月にこの「豊饒の海」の舞台を鑑賞する機会を得た。公演はてがみ座の長田郁恵が翻訳・脚本、英国ロンドンのオールドヴィックシアターのアソシエイトディレクターであるマックス・ウエブスターが演出を手がけ、「豊饒の海」四部作の一つの作品として舞台化したものである。第一部の「春の海」はよく舞台や映画にも取り上げられているが、四部作からなる大河小説をまとめて演出することは至難といわれてきた。本多繁邦が生涯執着することになった親友松枝清頭という「美」の象徴を俳優東出昌大が務め、脇役も重厚な布陣を揃え、特に老齢期の本多繁邦を演じる笈田ヨシの演技は観客を三島由紀夫の夢の美の世界に誘っていた。本多が60年間も思い描いてきた輪廻転生は果たして思い違いであったのか。これが最期に我々への問いかけになっている。

では、輪廻転生とは何であろうか？三島由紀夫の思想はさておいても、この神秘的な観念で、この現世という迷界に終止符を打つこ

とができるのであれば、自己に取っては幸いではなからうか。一蹴りにはできない。そんな思いで、私には少し輪廻転生思想を哲学的・科学的に研究するきっかけができたのである。「輪廻転生とは、死んでもまた新たな肉体に生まれ変わるという観念」である。この観念の起源は古く、2500年前にさかのぼることができるそうだ。何よりも興味深いことは、現代社会においてもなお、広く世界中で支持され信奉されているのである。宗教とは関係しないところで、「輪廻転生はあると思う」と回答する人は日本でも42.6%にも上る。しかし、輪廻転生といっても、時代や地域によって多くのバリエーションがあるので、一言でまとめるものではない。竹倉史人氏（東工大）は、生まれ変わりを3つの類型、〈再生型〉、〈輪廻型〉、〈リインカーネーション型〉に区別している。まず、〈再生型〉は、古代から世界中の民俗文化に見られるもので、生活習俗に近い概念である。一方、〈輪廻型〉は、古代インドにおける転生思想で、戒律を遵守し、瞑想やヨガを実践することで、輪廻からの解脱が目指さ

れている。更に、ヘリインカーネーション型は、19世紀ヨーロッパから発展し、来世を自分の意思で決定するという自己決定主義が説かれており、現代のスピリチュアリティ文化に深い影響を及ぼしている。現代では、このような輪廻転生に密接に関係している「前世の記憶」について、ヴァージニア大学医学部の付属機関DOPSが研究を推進し、果たして「前世の記憶」に客観性があるかどうかを科学的に検証する研究が行われているようである。

ここで、実証的な証拠、前世の記憶に基づいて科学的検証がなされた報告を見てみよう。前世の記憶は子供達に多く見られている。多くは2才から4才にかけて「前世」を話し始め、5才から7才くらいになると話をしなくなるという。DOPSの調査によると、子供達が自発的に語った台詞は下記のようなものである。「お母さんは僕のお母さんじゃないんだよ」「ぼくにはもう1人のお母さんがいてさ」「それはあたしがお母さんのおなかに入る前におきたんだよ」「あたしには旦那さんがいたの」「ぼくは前に別の町に住んで

いたんだけど」「僕は車の事故で死んだんだよ」「あたしがお父さんのお父さんだった時のことを覚えてる」……

最近の事例としてはアメリカABC放送の番組で取り上げられた例がある。2000年にアメリカのルイジアナ州で生まれた子供が2才になった時から異変が始まった。頻繁の夜泣きに続いて、同じ言葉を繰り返し言う（彼はようやくいくつかの単語を並べて文章が作れる時期だった）ようになったそうである。「飛行機が墜落！炎上！出られない！」これは後で、太平洋戦争の硫黄島の戦闘でアメリカのパイロットが日本軍に撃墜された様子であることが判明した。両親とDOPSが調査に乗りだし、彼が語った飛行機の絵や名前、また同僚の正確な名前などから調査を進めていくと、実際にその戦闘で戦死したパイロットが判明したというのである。この事実から、この子供は前世の記憶を持って、生まれ変わったという説明が一番合理的な考えであると結論づけられた。これはほんの一例に過ぎず、このような子供の語る「前世の記憶」の事例を、DOPSでは全世

界から2600件以上収集し、コンピュータでデータベース化されているのである。更に、2013年に「前世の記憶」についてデータ分析を行った中部大学教授の言語学者大門正幸氏の資料を紹介する。

たいのが、⑥である。前世の人物は横死しているケースが多いというところであるが、これは寿命による死よりも突発的な死を経験している方が、「前世をよく覚えていて」ということらしいのである。

現代人は、「仏教」や「キリスト教」の信者で無い方が転生を信じ、肉体が減んでも靈魂は死なずに存続すると考える割合が多いらしい。前掲の3型に共通するのは、転生は、「迷い」「未練」を残していると、輪廻転生を何度も繰り返して、究極的には仏教という様な多様性の中で生活を営み、多くの精神思想や物質発明が次世代の子供や孫に順次引き継がれていく運命を担っているわけであるが、このような現世では達成できなかった思いを、来世への希望・期待として多くの人々が念じていることは大いに理解できるように思える。しかし、このような我々の切ない願望、つまり次回は来世でうまくやろうと思う考えやその記憶は科学的に蓄積されているデータによると、殆ど期待できないようである。この事実は私に

取つても少々残念である。ここに記述したように、これまでの私の理解は不確かなものであり、更に今後も様々な資料から輪廻転生という観念をより理解し、「科学的・実証的」に辿っていきたいと考えている。

### 参考文献

『豊饒の海』全四巻 三島由紀夫  
新潮社文庫

『生命の起源』オパーリン、石本  
岩波書店

真訳  
『輪廻転生』竹倉史人  
講談社現代新書

『人はひとりて死ぬ』島田裕巳  
NHK出版新書

『前世を記憶する日本の子どもたち』池川明  
ソレイユ出版

【筆者紹介】  
平成30年9月入会。宮城県仙台市生まれ、現在茨城県つくば市在住。仕事の関係で30才頃につくば市に移住してきました。昔から本を読むのが好きだった関係で、歴史に関係する本も読んでいますが、現在概ね仕事も引退して、世界史・日本史に関係した勉強をしたいと思つて、横浜歴史研究会

①子供が過去生について語り始める平均年齢は2才10ヶ月。自分から話さなくなる平均年齢は7才4ヶ月。②過去生の死から次の誕生までの平均年月は4年5ヶ月。③同じ宗教内での生まれ変わりが多いものの、違う宗教に生まれ変わる事例も存在する。④北米のネイティブ・アメリカンの事例とナイジャリアの事例は、全て同一家族か近親者間での生まれ変わり。⑤前世の人物が実際に見つかった例は72.9%、見つかっていない例は27.1%。⑥前世で非業の死を遂げた事例は67.4%。⑦生まれ変わりによつて、経済的環境や社会的地位が向上する場合もあれば、逆の場合、変化しない場合もあり、一定の法則性は見つからない。⑧前世で悪いことをしたから今世で身体に障(し)ょうがい)があると語る事例はまれ。私がこの中で特に注目し

の門を叩きました。入つてから余りのレベルの高さに圧倒され続けおられます。少しでも皆様のレベルに追いつけるよう励みたいと思つておりますので、宜しくお願ひ致します。

